

## Ⅲ 富士ノ上Ⅱ遺跡周辺における奈良時代集落の様相

### — 竪穴住居跡の規模別分類とその構成について —

#### 1 那賀郡幡田郷における奈良時代集落の調査

茨城県ひたちなか市富士ノ上Ⅱ遺跡は、那珂川河口左岸台地上に立地する。奈良時代においてそのあたりは、『倭名類聚抄』を参考にすれば、常陸国那賀郡幡田郷に比定される〔文献1〕。郷は人的編成の単位であり、本来領域を伴わないが、里編成時に領域を持つ村を基礎にしたという考え方〔文献2〕や、郷域の成立が8世紀中葉にさかのぼるのではないかという見方〔文献3〕などもあり、実態としては郷域という領域を伴っていたとみるべきであろう。地理的特徴や他郷比定地との位置関係などをもとに、太平洋と本郷川に挟まれた那珂川河口左岸地域を仮に幡田郷と設定してみたい〔文献1〕。広い谷が生活領域を分ける境界として機能していたとする推測〔文献4〕も、本郷川による開析谷が幡田郷と岡田郷の境界になることを考えさせるものである。

富士ノ上Ⅱ遺跡において調査された第1A号住居跡および第2号住居跡は、8世紀第3四半期頃に位置づけら

れているが、当時の富士ノ上Ⅱ遺跡周辺における集落は、どのような様相を呈していたのであろうか。富士ノ上Ⅱ遺跡の調査は遺跡全体の一部にとどまるため、集落様相を明らかにすることは困難であるが、周辺地域の様相を探ることで、富士ノ上Ⅱ遺跡における奈良時代住居跡の位置付けも可能になるのではないだろうか。そこで、幡田郷における近年の調査から、船窪遺跡〔文献5〕・半分山遺跡〔文献6〕・鷹ノ巣遺跡〔文献7〕の奈良時代集落を参考事例として取り上げ、以下分析を進めてみたい。

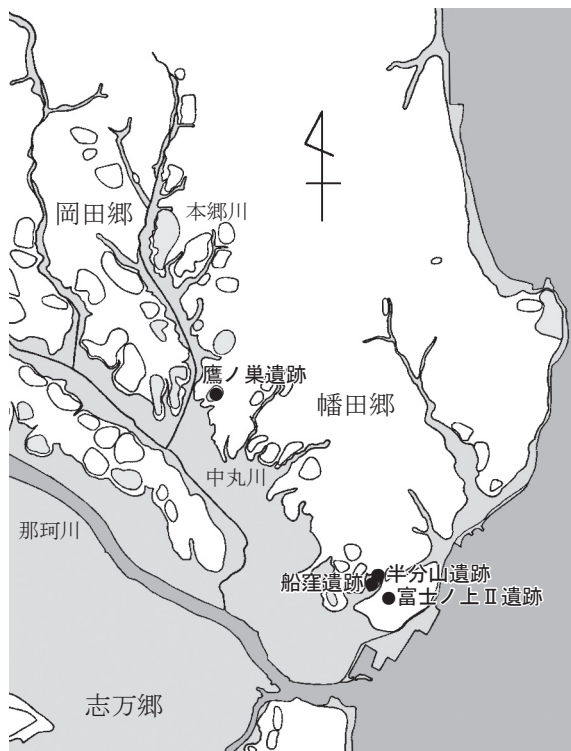
#### 2 規模からみた竪穴住居跡の分類

まず、各集落遺跡において調査された、奈良時代（8世紀）に属すると思われる住居跡から、竪穴部規模の判明する事例を抽出し、規模分布図（第39図）を作成してみると、竪穴部規模はおおよそ5つのまとまりをもち、竪穴部規模にもとづくⅠ類からⅤ類の類型が設定できた。

- Ⅰ類 一辺8m前後の規模を持つ住居跡
- Ⅱ類 一辺6m前後の規模を持つ住居跡
- Ⅲ類 一辺4mから5m前後の規模を持つ住居跡
- Ⅳ類 一辺3m台の規模を持つ住居跡
- Ⅴ類 一辺2m前後の規模を持つ住居跡

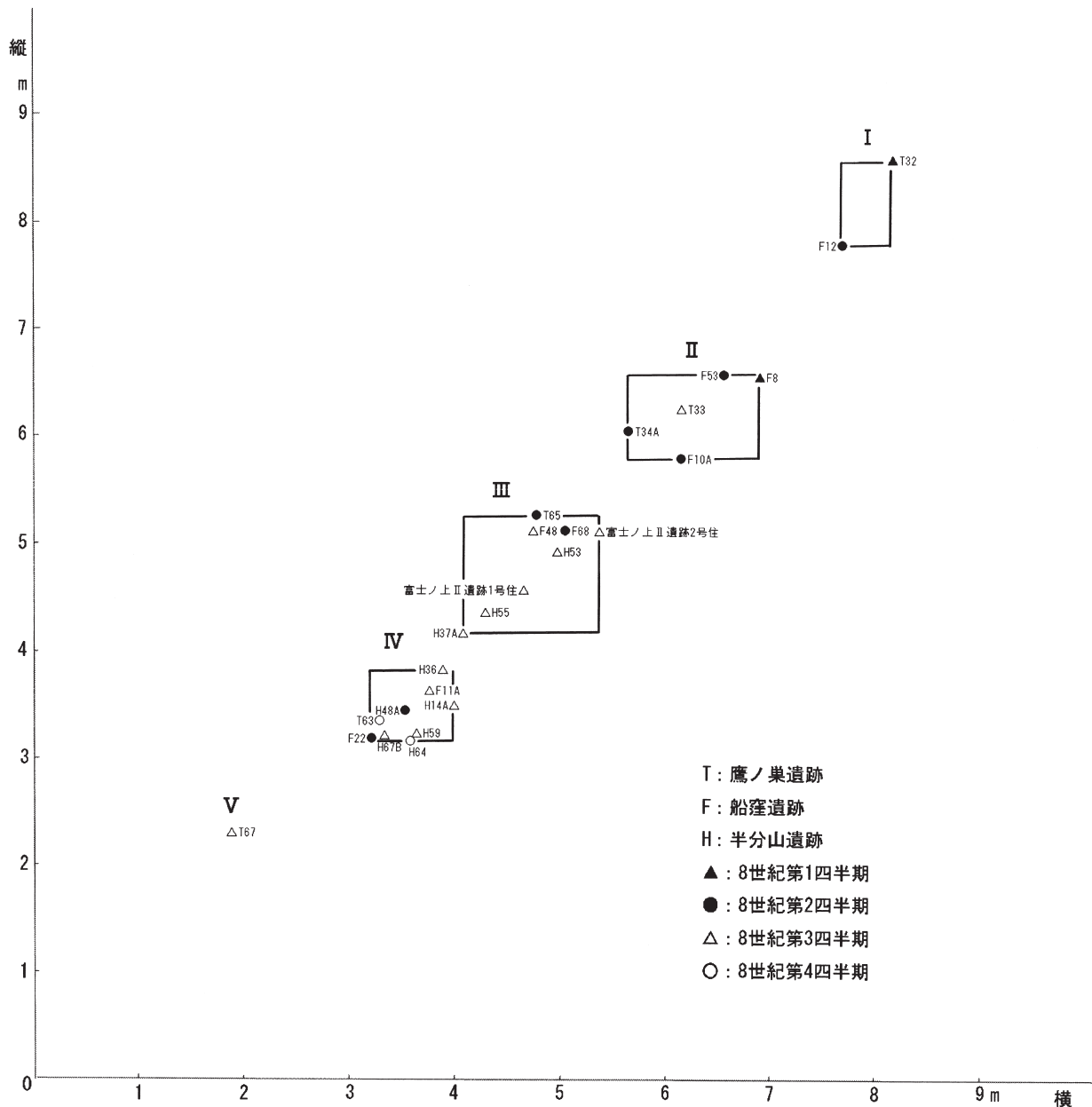
規模分布図をみると、Ⅱ類・Ⅲ類がデータの散布範囲が比較的広いのに対し、Ⅳ類はデータ量が多めであるにもかかわらず、比較的散布範囲は小範囲に収まり、規模の幅が小さいことがわかる。その要因を考えるため、Ⅱ類・Ⅲ類・Ⅳ類の住居跡内部の空間利用を想定してみた。

竪穴部中央部の竈前面における床面の硬化範囲付近を居間とみなせば、その両脇に寝間が想定される（第40図）。一辺6m前後の規模を持つⅡ類の竪穴住居跡と一辺4mから5m前後のⅢ類の竪穴住居跡では、その寝間部分の広さに大きな違いが生じる（第41図）。Ⅱ類では寝間に大人二人が縦に寝ることができる広さがあるが、Ⅲ類ではそれは困難と思われる。おそらくⅡ類とⅢ類の規模の



第38図 那賀郡幡田郷における奈良時代集落

（奈良・平安時代遺跡の分布を示す。トーンのかかる遺跡は、遺物が報告されている遺跡である。）



第39図 竪穴住居跡竪穴部規模の分布

違いは、居住人数の差が主な要因であったのだろう。

ではⅢ類とⅣ類ではどうだろうか。Ⅲ類とⅣ類は寝間部分に縦に二人寝ることが困難であり、居住人数に差は認められない。そうするとⅢ類とⅣ類の住居面積の差は、炊事具や生産具といった生活用具の量や、棚の設置等が関わる可能性が高い。Ⅳ類の規模幅が小さいのは、所有する生活用具が少なかったため、その多寡による住居規模の差が生じにくかったことが理由として考えられよう。

このように想定してよければ、Ⅲ類とⅣ類の間には住居跡の性格に大きな差が存在することが推測される。その差は所有品の違いとともに、住居構造の違いにも現れ

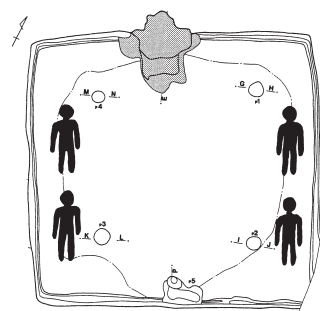
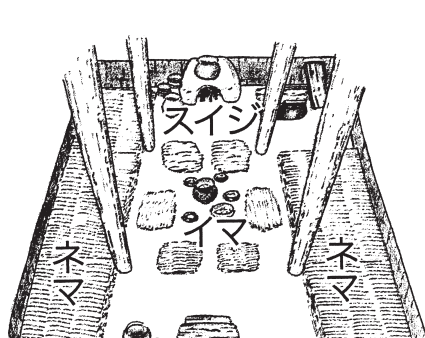
る。幡田郷における8世紀の住居跡を四半世紀ごとに分類すると、Ⅲ類以上の住居跡は主柱穴を持つものがほとんどであり、Ⅳ類以下の住居跡は主柱穴を持たない（第42図）。このことは、Ⅲ類以上の住居跡の上屋がⅣ類以下より堅牢に造られていたことを窺わせる。また、住居掘形もⅢ類以上は四方外周全体を掘り込むタイプを主体とし、明瞭な掘形を持つものに対し、Ⅳ類は四方外周全体を掘り込むものは少なく、掘形の様相に統一性が欠ける。つまり、主柱穴や掘形のあり方からは、Ⅳ類は簡略的な構造を有する住居跡であることが指摘でき、性格的には、短期的居住を前提に建てられた住居であるとみなすことができるのではないだろうか。

以上のように、幡田郷8世紀集落の住居跡を規模で分類すると、手をかけた構造を有し、長期的な居住を前提としたと考えられるⅢ類以上の住居と、短期的な居住を前提とし、移動性が高かったと推定されるⅣ類以下の住居に大きく分けられそうである。さらにⅠ類からⅢ類は、居住人数の多いⅡ類以上と少ないⅢ類に分けることができる。Ⅰ類とⅡ類の規模の差が生じる理由はよくわからないが、集会施設の側面から理解できるのではないだろうか。つまりⅠ類住居の居住者は、より多くの人々を話し合いに招いたり、集落外の人物との交渉をする必要の

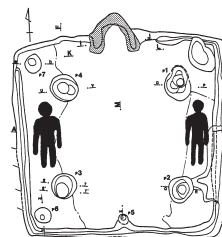
ある、集落を代表する者であったのではないかと考えた(註1)。  
い。

### 3 集落遺跡における竪穴住居跡の構成

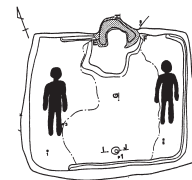
さて那賀郡幡田郷内の8世紀集落において、住居跡の規模別類型はいかなる構成をとるのだろうか。結論から述べれば、各集落における竪穴住居群は分布からみて、Ⅲ類以上の竪穴住居で構成される中心部分と、Ⅳ類以下の竪穴住居で構成される周辺部分に分かれるようである。あえて想像するならば、移動性が高く、竪穴住居



Ⅱ類 (船窪8住)



Ⅲ類 (半分山53住)

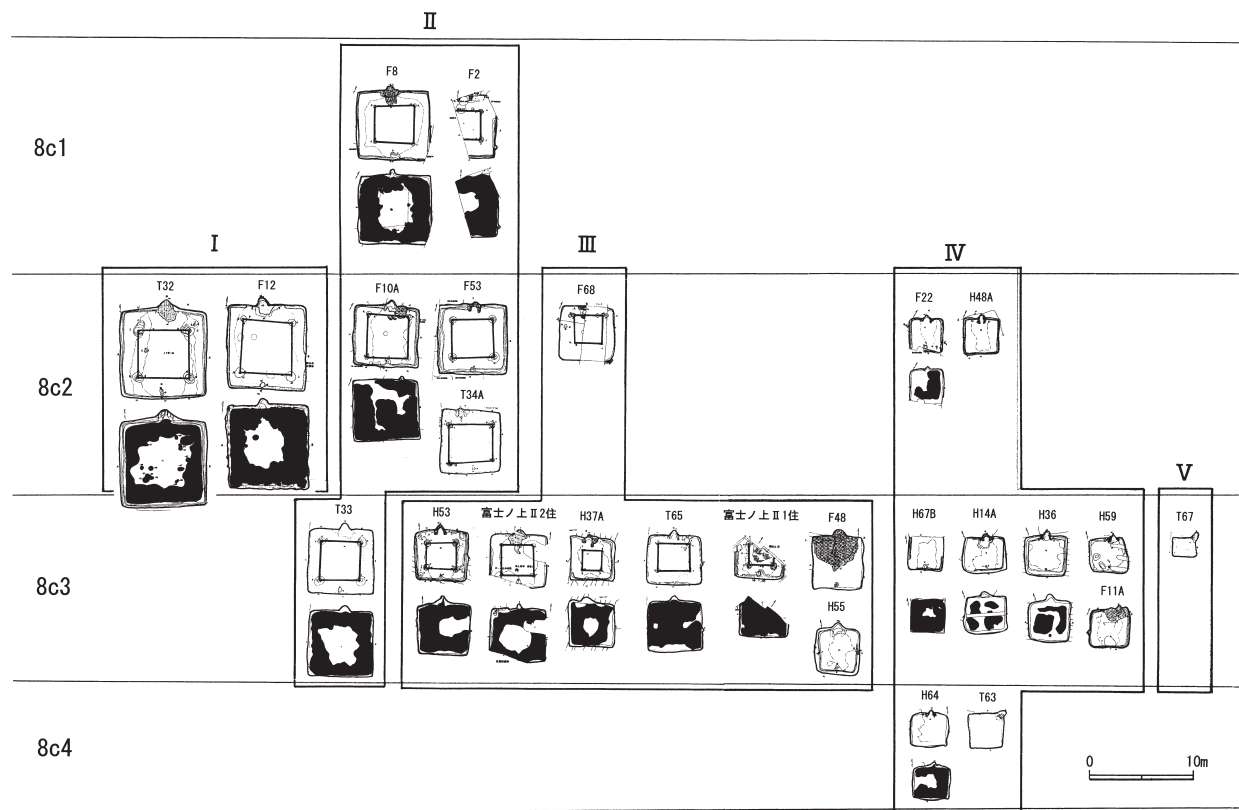


Ⅳ類 (半分山14A住)

第40図 竪穴住居跡の空間利用

(〔文献8〕より引用)

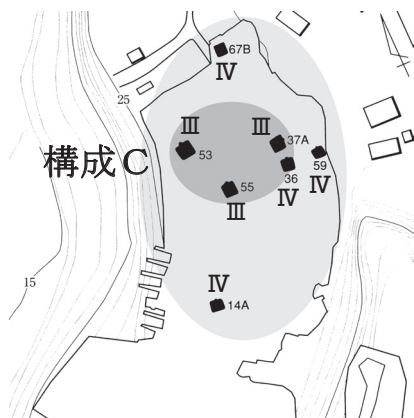
第41図 寝間面積の比較 (人物の身長は160cm)



第42図 規模別にみた竪穴住居跡の分類と消長 (黒塗り部は掘形掘削部を示す。)



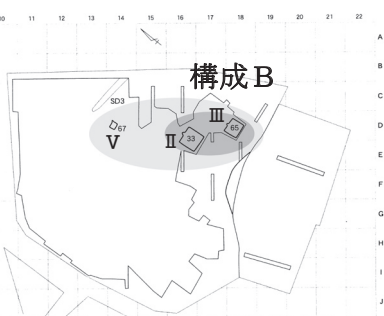
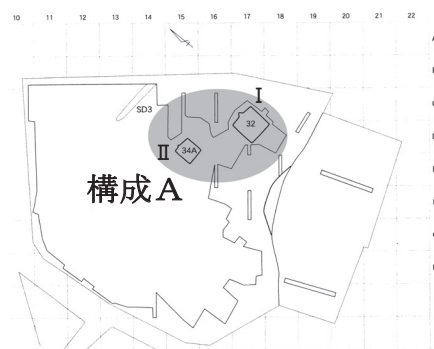
第43図 船窪遺跡の竪穴住居跡群 (8c.2)



第45図 半分山遺跡の竪穴住居跡群 (8c.3)

群の周辺部分に展開するIV類の竪穴住居の居住者は、他所からの移住者、つまり当時浮浪逃亡者として扱われていた小作経営を主とする人々であるのではないかと思うのである。直木孝次郎氏は天平13年6月の山代国移を挙げ、そうした浮浪者が有力な郷戸の内に寄口的な寄寓者として取り入れられていたと述べられている[文献9]。IV類存在の背景にも、そうした事情を想定したいのである。

竪穴住居跡群の構成としては、集落形成の主体になると思われる、住居跡群中心部分のあり方に注目する必要があるだろう。本稿で扱う幡田郷の8世紀集落においては、その中心部分の構成として次の三種類の様相が指摘できる。



第44図 鷹ノ巣遺跡の竪穴住居跡群

(上：8c.2, 下：8c3)

構成A I類とII類により構成されるもの

構成B II類とIII類により構成されるもの

構成C III類のみで構成されるもの

構成Aの事例をみてみよう。船窪遺跡の8世紀第2四半期においては、調査区北側に1棟のI類(F12)と2棟のII類(F10A・53)からなる、構成Aをとる中心部分があり、中心部分から南方に少しはなれてIV類が1棟(F22)存在している(第43図)。I類住居からは小破片であるが、内面放射状暗文が施され口縁部内面に沈線が巡る橙色を呈する小型の丸底杯が出土している。また関係は明らかではないが、東方の猪谷津遺跡から出土している同時期頃の円面硯2点も注目でき、あるいは船窪遺跡の構成Aに居住する人物が廃棄したものである可能性もあろう。このほか、鷹ノ巣遺跡8世紀第2四半期の住居跡群も構成Aを形成する(第44図上段)。鷹ノ巣遺跡の構成Aは北方に溝跡(SD3)を伴う可能性がある。

次に構成Bの事例としては、鷹ノ巣遺跡8世紀第3四半期の住居跡群がある。8世紀第2四半期に構成Aが展開していた区域に成立しており、1棟のII類(T33)と1棟のIII類(T65)からなる、構成Bをとる中心部分があり、中心部分から北西にやや離れて、V類が1棟(T67)



存在している（第44図下段）。北部の溝跡（SD3）には、当住居跡群の廃棄品と同時期の土器が廃棄されているので、構成Bと溝跡は明らかに共伴するものである。鷹ノ巣遺跡8世紀第3四半期の構成Bからは瓦が出土しており、特にⅡ類住居（T33）からは「山田文マ子夜児」と刻書された丸瓦が出土している。調査者の稲田健一氏によると、この丸瓦は竈煙道に利用されていたものと推定されているので、おそらくⅡ類住居で用いられたものであろう。Ⅱ類住居に居住する人物は、丸瓦を用いるような寺院や正倉などに行く立場にあり、そこで瓦を入手したものと考えられる。なお鷹ノ巣遺跡第2四半期の構成Aの住居跡覆土中に廃棄されていた瓦片は、第3四半期の構成Bで使用されたものの一部が廃棄されたものとみることができる。

構成Cの事例としては、半分山遺跡8世紀第3四半期の住居跡群がある。やや広く距離をおいて建つ3棟のⅢ類（H37A・53・55）からなる、構成Cをとる中心部分があり、中心部分から離れてⅣ類が、北に1棟（H67B）、東に2棟（H36・59）、南に1棟（H14A）存在する（第45図）。当住居跡群からは特に目立った遺物は出土していない。なお、船窪遺跡8世紀第2四半期集落において、調査区南東部分よりⅢ類が1棟（F68）検出されている。明確ではないがこれも一応構成Cとして捉えておく。

以上のように各集落の堅穴住居跡群は、構成A～構成Cをとる2～3棟からなる住居跡を中心部分とし、その周辺に小型のⅣ・Ⅴ類住居を展開させるという基本的構造では一致している。ただ構成Aが、集落の集会施設としても利用することが可能なⅠ類のような大型の住居跡を核に形成されている点は、構成B・Cとの違いとして注意されよう。

また、鷹ノ巣遺跡の構成Bにおける溝の存在や瓦の利用などは、一般集落の中では特異な様相である。構成A・Bは集落経営の主体となる集団が居住した住居跡群である可能性があり、構成Bより構成Aの規模が大きい点からみて、構成Aの居住者が集落内で相対的により有力な立場にあった可能性がある。

構成CはⅢ類のみから形成されるように、中心部分における優劣がなく、なおかつ集会施設として利用可能な大型住居の存在もないことからみて、集落周辺部に立地し、集落経営の主体的集団に経済的に依存しながら居住

する人々の住居群であった可能性が高い。それは特に目立つ遺物が構成Cから出土していないことにも現れている。船窪遺跡における構成Cの場合も、北部に位置する構成Aに従属する立場にあったことが考えられる。こうした8世紀第3四半期における「構成C＋Ⅳ類」という集団は、集落経営の中心となる集団の生産規模拡大に伴い各地に成立してくるのかもしれない。

#### 4 富士ノ上Ⅱ遺跡第1A・2号住居跡の理解

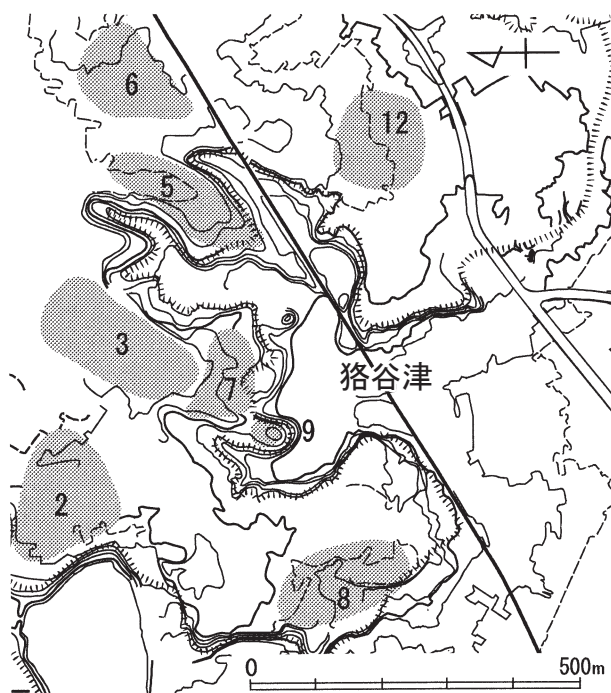
最後に、今回の富士ノ上Ⅱ遺跡発掘調査で検出された8世紀第3四半期の住居跡である第1A・2号住居跡の位置づけについて考えてみたい。

第1A号住居跡は全体が明らかではないが、主柱穴の位置などから推定復元すると、第2号住居跡とともに規模的にはⅢ類になることがわかる。両住居跡ともにしっかりした掘形をもち、主柱穴を有する。そうした点からみると、これら住居の居住者は、Ⅳ類に居住するような短期的居住を前提とした移動的集団ではなく、長期的居住を前提として当地に住居を建てた集団であったといえよう。

富士ノ上Ⅱ遺跡第1A・2号住居跡からの出土遺物は廃棄遺物を中心としており、特に居住者の性格を示唆するような遺物は出土していないが、見事な緑色の自然釉がかかった長頸瓶の一部が第1A号住居跡覆土上層から出土している。廃棄品であるので、調査区外にこうした優品を使用するような人物が居住する次期の住居跡が存在するのであろう。もしかするとその住居跡はⅠ類もしくはⅡ類といった大型の規模を持つ住居跡になるのかもしれない。こうした大型住居が8世紀第3四半期の時期にも周辺に存在し、そうした構成Aや構成Bを形成する住居群の代表者の生産力に依存しながら、Ⅲ類の富士ノ上Ⅱ遺跡第1A・2号住居跡は存在していたのではないかと考えたい。

なお、両住居跡の竈灰からイネを主とする炭化種実が検出されたことから、当住居の居住者が稲作に関わっていたことは明らかである。地形的にみて遺跡の西方に入り込む猪谷津を中心とする低地一帯に水田が展開していたのではないかと考えられる（第46図）。そうした水田の経営に関わる集落を構成する住居として富士ノ上Ⅱ遺跡第1A・2号住居跡は存在していたのであろう。船

窪遺跡や半分山遺跡も同じ低地における水田耕作に関わりながら存在していたと思われることから、それら遺跡を含む狛谷津周辺の遺跡群として富士ノ上Ⅱ遺跡は存在し、奈良時代においては各遺跡が密接な関係をもちつつ集落経営が展開していたことが想像されるのである。



第46図 狛谷津周辺の奈良・平安時代遺跡  
(12が富士ノ上Ⅱ遺跡。遺跡名は第3図参照)

## 文献

- 1 佐々木義則2000「2 歴史的環境 -奈良・平安時代-」『武田石高遺跡』ひたちなか市教育委員会、ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 2 鬼頭清明1989「郷・村・集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』22, 国立歴史民俗博物館
- 3 山中敏史1998「律令国家の地方末端支配機構-研究の現状と課題-」『律令国家の地方末端支配機構をめぐって-研究集会の記録-』奈良国立文化財研究所
- 4 松村恵司1998「律令国家の末端支配と集落」『律令国家の地方末端支配機構をめぐって-研究集会の記録-』奈良国立文化財研究所
- 5 稲田健一ほか2005『船窪遺跡』ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 6 稲田健一ほか2004『半分山遺跡』ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 7 稲田健一ほか2008『鷹ノ巣遺跡 第2次調査の成果』ひたちなか市文化・スポーツ振興公社
- 8 谷鹿栄一ほか2007『住まいを読む』千葉県立房総のむら
- 9 直木孝次郎1968『奈良時代史の諸問題』塙書房
- 10 宮本常一1950『ふるさとの生活』

## 註

1 村の中心になる大きな家の集会施設的性格について、宮本常一氏は次のように語っている。「力のあるものが、何人かの人をひきつれて未開の土地に入ってゆき、みんなといっしょに苦心して村をつくった場合には、その中心になる家と、いっばんの百姓とは仲のよいものです。長野県の伊那谷には、そういう村がいくつかあります。村の中心になっている家は、おどろくほど大きなかまえをしていて、何かまわりの人たちに権力をしめそうとしているように見えますけれど、その家のなかに入っていくと、土間のひろいことと、イロリのある間の大きいにおどろきます。そこが村の人のあつまる場所で、村人の寄合のあるときには、かならずそこへ集まったものでした。正月の初寄から田植え、山の口あけの相談、田へ水をひくはなしあい、伊勢講、秋葉講まで全部そこで行われたのです。このようにして、親方の家を中心にして、むすばれていました。』[文献9]